

Title	動詞呼応の種類(その2)
Author(s)	出口, 厚実
Citation	大阪外国語大学学報. 48 p.1-p.18
Issue Date	1980-03-01
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80782
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

動詞呼応の類型（その2）

出 口 厚 実

On the Typology of Nominal-Verb Agreement (2)

Atsumi DEGUCHI

In Chapter I we were concerned with the classification of agreement phenomena between the verb and the dependent noun phrases.

In the present Chapter special attention is directed at the non-normal agreements, which are deviant in some significant sense from a hypothetical straightforward model of the nominal-verb concord, specifically in respect of the grammatical relations or syntactic case systems. A tentative proposal will be presented for differentiating the deviant types as the following:

2.0 Non-normal agreements

2.1.0 Non-syntactic case agreement

2.1.1. Participation of semantic cases or features

Data from: Lakhota, Achenese, Guarani, Crow, Mandan, Wichita, Choctaw, Kapampangan, Machiguenga

2.1.2. Discourse factors: Genoese, Tagalog

2.1.3. Relevance of pragmatic features: Achenese, Japanese

2.2.0 Indirect agreement: Awa

2.3.0. Bi-stratal agreement: Cicewa, Palauan, Kimbundu

2.4.0. Mixed agreement: Chol, Hindi-Urdu, Jacaltec, Spanish

2.0. 変則呼応

本誌第45号（1979）pp. 1～17 所載の拙稿“動詞呼応の類型（その一）”で様々な言語に見られる名詞句—動詞呼応の事例を整理して、呼応の実現形式、呼詞の削除可能性、呼応項数、呼詞の文法関係などを基準にした予備的分類を試みた。それは、どちらかと言えば、諸言語を概括するおおまかな類型を求めようとするものであって、各言語が示す特異性や多様性の側面については触れるところが少なかった。この稿は、特に呼応に関する NP の文法関係に論点を絞りながら、この側面をやや詳しく掘り下げて見るのが目的である。

前稿では主語・目的語・絶対格・能格 etc. の用語を慣用又は各言語の分析者に従い殆ど検討を加えないまま利用したが、このような文法的ラベルの実質は一律でなく、ユニバーサルな規定が

容易でないことが指摘されている。従って、A, B 2 言語を共に主語一格呼応タイプと分類したとしても、もし両言語において「主語」の示す文法的特性が等しくなければ、呼応自体も完全に同質ではない。各文法関係は統語・意味・現用論的な特性の複合であるという考え方に立ち、異言語間の、例えば「主語」に多くの共通定義特徴がある限りに於いて、近似的に A, B を主語（とのみ）呼応（する）言語のクラスに分類することが妥当であり、類型的に同一と呼べるであろう。しかし、小論が扱う言語すべてについて、その統語的格範疇を精査し、その異同に基づく呼応の差異を明らかにし尽くすことは到底不可能である。

そこで、本章はまず理想的な、無標の、呼応の常態とも言えるべきものを仮定し、実際に観察される呼応現象がどのようにそれと異なるかという面からその多様性を考察することにする。§1 で分類した各タイプの典型的呼応は、ある表層文法関係の NP(s) と動詞が存在すれば、一定の相応カテゴリーを媒介として、すべての NP の生起において、すべての動詞形に一致形態素を出現させる。一般に呼応条件は表層格関係で規定されるのが平常であるが、深層統語格や意味役割が関与する例外もある。また一定の格と呼応が成立しても、ある種の構文で部分的に呼詞のない一致形が出現したり、あるいは一致が停止する事例も稀でない。大抵の呼応言語の場合、むしろどこかに上のような模式に合致しない一面をもつと推定される。上述の理想モデルにはずれる様々な deviant な呼応の有り方を“変則呼応”として見て行くと、ここで取り上げられるケースは恐らく実在する多種多様な呼応・一致の片鱗であり、今後の研究の拡大深化によって、未だ未だ新しいタイプや亜種が発見されるであろう。また §1 の類別で各タイプの例示に引用された多くの言語も、ここで焦点を合わせようとする格関係以外の点で“変則的”であって、本章で扱われないものが“完全無欠な”呼応をもつことを含意しないことは言うまでもない。

なお、主語・目的語 etc. の名称は、本来、対格型言語の文法関係の格分類を想定したもので、格類型に関して中立な普遍的統語格を指すときは次の呼称を用いることにする。

中格（自動詞主語、S 格⁽¹⁾）：1 項述語文での辞項と動詞の統語関係

動格（他動詞主語、A 格）：2 格述語文における、より能動的な役割を担う辞項

受格（他動詞目的語、O または P 格）：同上文で、より受動的役割を果す辞項

絶対格・能格という呼び方に釣り合わせるには主格・対格の名称が適切かも知れないが、後者は慣習的に表層格概念に利用されることも多いので紛らわしく〔特に深層レベルに言及する時はこれを用いない〕、不均衡を承知の上で「主語」「直接目的語」をも使用し続ける。

2.1.0. 非統語格呼応

呼詞になり得る NP が統語的格によって条件づけられない呼応の変種がいくつか存在する。

2.1.1. 意味役割の参与

2.1.1.1.

呼詞 NP のクラスが意味役割に基づいた範疇であるケースが Lakhota (Dakota) に見られる。

主語、絶対格などの関係概念は意味と深く結びついているものの、名詞句の動詞に対する意味上の役割を双一義的にストレートに表現していない。しかし Lakhotá の呼応形態素は呼詞の意味役割（非代名詞 NP に対する形態的格表示はない）別に 2 組み存在し、その人称・数と相応している。Van Valin⁽²⁾ に従えば、この 2 種は行為者格 (Actor), 被動者格 (Patient) と呼ばれるべきものである。行為動詞の動作主は行為者格で表わされ、一方、他動詞と共に生起する Objective, Goal, Source 等は Patient に指定される。また Experiencer のうち、意図的能動表現の wāyāka ‘to see’, chí ‘to want’, slolya ‘to know’ は Actor の呼応形態素をとるが、非意図的な受動的経験を示す動詞, v.gr. kh’âza ‘to be sick’, kha’ta ‘to be hot’ は被動者格で呼応する。

- (1) a. ma- ϕ -kté⁽³⁾
 me(P)-he(A)-kill ‘He killed me’
 b. wa-hi⁽³⁾
 I (A)-arrive ‘I arrived’
 c. ma-híxpaye⁽³⁾
 I(P)-fall down ‘I fall down’
 d. miye wichashta o-wicha-wa-kiye⁽⁴⁾
 I (emph) man them(P)-I(A)-help
 ‘I helped the man’
 e. slol-wa-ye⁽⁵⁾
 know-I(A) ‘I know it’
 f. ma-kha’ta⁽⁶⁾
 I(P)-ne hot ‘I am hot’

以上のように Lakhotá では意味に基づいて中格の半分が動格と、他の半分が受格と同一視される結果、概ね意味対立による 2 項呼応を示していることになろう⁽⁷⁾。

2.1.1.2.

Guaraní 語⁽⁸⁾では動詞は 3 種類に分類され「他動詞」(e.g. give, steal, know, order, suspect, like) は動格・受格と呼応し「自動詞」類(go, remain, continue, follow, fall) は動格接頭辞をとる。一方、第 3 群の動詞 (remember, forget, tell a lie, weep 他、形容詞に対応するような述語) は受格と殆ど同一の呼応形態素で特徴づけられるという。これは Actor/Patient の意味的 2 格呼応の例とみなせる。

Crow⁽⁹⁾ (Siouan), Mandan⁽⁹⁾ (Siouan), Wichita⁽¹⁰⁾ (Caddoan) も同種の呼応に分類できるものと思われる。

2.1.1.3.

Achenese (Indonesian) は動作主 NP と一項一格呼応すると見られる。この言語は受動文において動詞が主格 (=派生主語) とではなく基底主語と呼応するので関係文法のアプローチで特に

注目されてきた。Lawler は主語 NP との間に呼応が成立すると述べているが、彼の data に関

する限り、動格も中格も Agent であり、かつ受動化が行なわれた後も動格 (i.e. Agent) と呼応するのであるから、“Achenese は一貫して Agent という意味役割をベースに呼応する”とみなす Dik⁽¹²⁾の結論は一応首肯できる。但し、もし非行為者的中格が自動詞に呼応を惹起する事実があれば、上述のような意味役割による単純な呼応とみなすことは不可能である。Agent が文中にある時は Agent が呼詞になり、なければ主格と呼応するという、統語格と非統語格が競合し、かつ後者が優先するタイプの呼応を認めなければならないだろう。

Mississippi のアメリカ・インディアン語の一つ Choctaw⁽¹³⁾ (Muskogean) も呼応が意味役割を介して行なわれる言語である。動詞は行為者格 (A), 被動者格 (P), 与格 (D) の 3 種の affix (1 sg. A を除いてすべて接頭辞) を呼応形態素としてとる。行為者格は -pisa- ‘見る’ や -abi- ‘殺す’ etc. 大抵の動格に対して用いられる。また -iya- ‘行く’ -hiki:ya- ‘立っている’ -illi- ‘死

ぬ'を含む活動的・意図的動詞の中格も A 呼応である。-abi:ka- '病気だ', -ačokma- '良い', -nokšo:pa- '恐れる' の経験者は P affix を要求する。-nokšo:pa の対象や, '気分が良好' の意であれば -ačokma- も D case をとる他, 間接目的語(受益者格)も与格で表現される。

ない。呼詞と応詞の表層屈折にのみ注目すれば、両者は統語格と意味役割に異格分裂していて、一般の agreement と様相を異にする。 (cf. その一, p. 14 (44)e.).

- (4) a. hattak+at oho:yoh(+a:) i:-φ-nokšo:pa-h
 man nom woman obl 3(D)-3(P)-be afraid-pres
 marker marker
 'Man is afraid of woman'
- b. hattak+at obo:yoh(+a:) φ-im-φ-ano:li-h
 3(A)-3(D)-3(P)-tell-pres
 'Man tells it to woman'

2.1.1.5.

意味役割の一つである Agent と主語が異なる NP によって表わされる時、両 NP に同時呼応する例が Kapampangan⁽¹⁴⁾ (Philippines) に見られる。この言語では表層主語は ing を前置され、動詞に呼応を引き起こすが、(5a) の受格が主語化された version, (5b) では派生主語である ing poesia のみならず、動格で Agent の ning lalaki と一致を示している。即ち Kapam-

- (5)⁽¹⁵⁾ a. sumulat ya ng poesia ing lalaki
 write he obj poem subj boy
 marker marker
 'The boy will write a poem'
- b. isulat na ya ning lalaki ing poesia
 be-written it-he Agent boy subj poem
 (=ne) marker
 'The poem was written by the boy'

pangan の agreement を文法関係で規定しようと試みるならば、この規則は関係変換の前後に 2 度適用され、始めの呼応で得た主語呼応形態素が後の新主語呼応後も無効にならないような手段が講じられなければならない。しかし、cycle 前の呼応で表層まで register されるのは動格のすべてとではなく、Agent との一致だけであるならば、Gary and Keenan⁽¹⁶⁾ の解釈のように異なる 2 つの統語レベルで呼応が成立するのではなく、主語⁽¹⁷⁾と意味役割の Agent の双方に同時呼応するとみなすことができるだろう。次例に見られるように受益者格、具格 etc. が主語に選ばれてもやはり、Agent 呼応と主語呼応は共存する。

- (6)⁽¹⁸⁾ a. simulat ya ing lalaki 'The boy writes'
 write he subj boy

- b. sultanan ne ning lalaki ing mestros
 write he-him Ag boy subj teacher
 'The teacher is written for by the boy'
- c. panyulat ne ning lalaki ing lapis
 write he-it Ag boy subj pen
 'The pen is written with by the boy'

2.1.1.6.

ペルー・インディオの言語である Machiguenga⁽¹⁹⁾ (Arawak) には free NP の格表示は殆ど存在しない。しかし動詞複合の中に主語呼応形態素の他、共演する名詞句の意味関係を表わすそれぞれの marking が出現し、加えてそのうちの一つ又は2つの NP に一致する suffix を持つ文がある。

- (7a) a. I-Kʷisa-ši-ta-ka-ro_i no-šinto_i hoa
 he-be angry with-vb-refl-her my-daughter John
 'John was angry with my daughter'
- b. I-tog-an-ta-iga-ka-ro_i ača_i camairinci
 3-cut-inst-vb-pl-refl-it axe field
 'They cut the field with an axe'
- c. O-pašit-an-ta-kʷe-na-ro_i no-šinto_i o-bašikaro
 she-cover-inst-vb-nrefl-for me-her my-daughter her-blanket
 'She covered my daughter with her blanket for me'

(7a) では名詞句 no-šinto が動詞に対して持つ意味格の marker である ši が動詞に含まれると共に、その NP の index と主語 hoa の一致形態素も内蔵する。(b) 文では主語と具格 NP, (c) 文では主語、対象格、受益者格の格指標が現われている。ところで上文の -ro が一致 marker である事は明らかであるが、共起する NP の意味役割を表示している -ši-, -an- は動詞の呼応形態素であると言えるであろうか。§ 2.1.1.1. で素描した Lakhota の一致形態素には NP の意味役割と人称・数が一括して記号化されている。名詞句の Case Marking が存在しない Quiche⁽²⁰⁾ (Mayan) でも動詞における marker は、単に文法関係—能格／絶対格のみならず、NP の人称・数カテゴリーをも表示している。それらに対し Machiguenga では両特性が分割されて2種の標識化を受けている。相応カテゴリーが人称・数以外のものを呼応外に除外すべきだという強い根拠は見当たらない。「格素性」が本来、名詞句に特有な素性であることが証明されれば、NP 自身に形態的特徴が顕在しなくても、feature が動詞へ転写されるプロセスを含んでいる故、やはり呼応の事例とみなされるべきであろう。しかし、意味格の特性が NP に自律的に備わっているのではなく、述語核から逆に名詞辞項へ伝播するという見方も成り立つであろうから、必ずしも名詞句に本来あるべき格表示が動詞に転出したと見る十分な理由がないことも事実である。このよ

うな動詞内記号化 (Verb Coding) の例は、やや様相を変えた姿で Tagalog など Philippines 諸語に特徴的に見られる (⇒ § 2.1.2.2.).

2.1.1.7.

意味役割素性が呼応の範囲を限定する場合がある。Tagalog の動詞は任意的に主語 (or Topic) の複数を mark する affix をとるが、それは主語が同時に Agent である時に限られる。

- (8)⁽²¹⁾ a. Kumakanta siya/sila
 sing he they
 b. Nagsisikanta sila
 sing (pl.) they
 c. *Nagsisikanta siya
 he

2.1.2. 談話機能の参与

2.1.2.1.

前稿1.4.1. で見た Genoese における付接代名詞の重複呼応は、NP が動詞に先行する “theme” である時に成立し、統語・意味的な関係のみで agreement が規定されない一例である。このように伝達内容の新旧または情報価としての相対的重要性に係わるカテゴリーが呼応の範囲を限定するのに役立つケースは少なくない。いわゆる話題化 (Topicalization) が代名詞コピーと共起し、部分的呼応を引き起こす一致例は多数の言語に観察される。NP の単なる有標位置として統語的形式に再解釈されていない、実質的な「話題化」においてその呼応には談話文脈の素性が参与すると言えよう。呼応の発生・萌芽と話題化の関係については §3. で今少し詳しく検討する予定である。

2.1.2.2.

呼応が意味役割で分類される NP で決定されるのか、統語範疇で制限されるのかの境界がしばしば不透明なのと同様に、談話 (Discourse) の要素と意味・統語単位とがすっきり分離できず、呼応の実質をつかむのが困難な場合がある。

Tagalog には Kapampangan のような呼応は存在しないが、両語を含めて Philippines 諸語における NP の機能と動詞内に示されるその marker, -um-, mag-, etc. の関係は、もしそれが呼応と称され得るならば、上記の 3 要素を不可分に内包する特殊な呼応形式である。Schachter⁽²²⁾ に従えば、Tagalog の単文を構成する名詞句の一つは Topic として前置標識をとる (ang 句と呼ぶ) と共に、動詞は、ang 句 NP がどのような意味役割を演ずるかによって、数種の affix で特徴づけられるという。次例文で A (ctor) T, G (oal) T, D (irection) T, B (eneficiary) T は、各々、行為者、目標、方向、受益者を示す NP が文の Topic として選ばれていて、動詞接辞としてその選択が記録されていることを表わす。Topic になる NP は definite であることが要求されるが、定性のみで Topic の資格が生じないことは上例から明らかである。

- (9) a. Mag-salis ang babae ng bigas sa sako para sa bata
 AT-will-take-out woman rice sack child
 ‘The woman will take some rice out of a/the sack for a/the child’
- b. Aalisin ng babae ang bigas sa sako para sa bata
 will-take-out-GT woman rice sack child
 ‘A/The woman will take the rice out of a/the sack for a/the child’
- c. Aalisan ng babae ng bigas ang sako para sa bata
 will-take-out-DT woman rice sack child
 ‘A/The woman will take some rice out of the sack for a/the child’
- d. Ipag-salis ng babae ng bigas sa sako ang bata
 BT-will-take-out woman rice sack child
 ‘A/The woman will take some rice out of a/the sack for the child’

一方、Tagalog の *ang* phrase は “topic” という語の通例の用いられ方に含意される、談話文脈における既知の話題として機能を必ずしも持たないと指摘する人もおり、残念ながら筆者はその実体を明確に掴むことができない。ともかく、(9) に見られる *mag-*, *-in*, *-an*, *ipag-* の動詞 affix は、談話機能上の prominence を与えられた 主要構成素の一つが動詞に対してどのような意味役割 (Actor, Goal, Direction, Beneficiary) を mark しているから、これらの接辞は当該 NP の意味素性に相応して変動し、従って呼応形態素とみなすことができるであろう。

この種の動詞屈折を voice-marker による活用と規定する例もあるが、(9b, c, d) が基本的な型式 (a) から派生する受動文と分析するべき十分な証拠があるのかどうか明らかでない。仮に “Topic” なる用語をやめて “subject” を使用するとしても、(b, c, d) 文の派生主語の semantic categories に従って動詞は形態を異にするので、外観上、呼応 (voice agreement) の体裁を示すとみなす事も可能である。NP に統語格の表示が存在せず、それを動詞呼応で行なう言語があるのと同様に、NP の意味的格が人称・数素性なしに動詞内に記号化されるのも広義の呼応としておく。

2.1.3. 現用論（語用論）の問題

2.1.3.1.

話者と聴者（あるいは文中 NP）との社会的関係や心理的距離が動詞の形式を左右する敬語法がどの範囲まで呼応現象に分類されるべきかは今後更に多くの data を調査する 必要があり、ここでは予備的な考察を示すにとどめる。例えば Achenese で、2・3 人称代名詞は、相手が話者に対し同年令か年長・年少かに応じた類別がなされ、動詞に対してもそれぞれに応じた prefix が共起する。3 人称 NP も呼詞となり得、動詞は free NP として用いられる代名詞の 2 種類を介して相応した呼応形態素をとる。

(10) ⁽²³⁾ 2nd Pers. Sg.	agreement morpheme
drɔn (older than speaker)	ni-
gata (same age)	ta-
kah (younger)	ka-
3rd Pers.	
gɔpnɔn (older or same)	gi-
jih (younger)	ji-

一方、独語 Sie/du, 仏語 vous/tu, 西語 usted/tú etc. の対立にも話し手と対称者との間の親近・共同体所属意識等により聴き手を区別して待遇し、動詞の呼応にもその対立が表出される。しかし呼応形態素はこの語用論的弁別をそのまま投影したものではなく、いずれの言語でも、他の文法的相応カテゴリー、i.e.「人称・数」に覆面されて意味・統語素性で呼応している点で Achenese と異なる。

2.1.3.2.

日本語の敬語表現のうち動詞に係わる部分を主語呼応⁽²⁴⁾の一種として分類すべきか否かは呼応の限界と範囲をどの辺に定めるかという根本的な問題を措いて考えられない。

- (11) a. 三郎が新聞を読んだ。
b. 中野先生が新聞を読んだ。
c. 中野先生が新聞をお読みになった。
d. 中野先生が新聞を読まれた。
e. 中野先生がそうおっしゃった。

まず呼応の表示手段であるが、(11 c, d, e) のように統語構成の変更（名詞化＋新規動詞の付加、助動詞の添加や補合法により敬語化がなされているのに注目しなければならない。Suppletive の使用は音形挿入上の特異性であって呼応ルールの性格は何の影響も受けないという見方もあるが、formal な基準で呼応の規定を試みようとする時、無視できない問題となろう。しかし、はっきりとした文法的カテゴリーである NP の「数」が能格ベースで広範な動詞に対して補充形で mark される Aguaruna⁽²⁵⁾ (Peru) のケースも存在し、これを agreement でないと決めつける訳にもいかない。ただ応詞の ϕ 異形態を一致形と認めないという制限を呼応に課すならば、これらは一致の事例に該当しないだろう。

第二に特殊な点はこの呼応の任意性で、(11 a, b) 対 (c~e) の対立は話者の主語に対する 2 種類の尊敬レベルを自動的に内包しているのではなく、前者の中立無色の文体に有標な「尊敬化」の加色を伴うのが後者で、談話全体のスタイルの如何によって、話し手は主語への敬意を保ちつつ (11b) を使用し得る option を持っているのではなかろうか。また謙譲や軽蔑の色づけをする (12b, d) についても同様なことが言える。特に、間接話法文の埋め込み文では敬語化は避けられ

- (12) a. 奴は新聞を読んだ。
 b. 奴は新聞を読みやがった。
 c. 父は新聞を読んだ。
 d. 父は新聞をお読み致しました。

ることが多いようである。 呼応規則適用の非義務性は、勿論、呼応の事実を否定するもので

- (13) a. 中野先生は昨夜拙宅へ来たとおっしゃった。
 b. 中野先生は昨夜拙宅へおいでになったとおっしゃった⁽²⁶⁾。
 c. 中野先生は昨夜拙宅へ来られたとおっしゃった。
 (14) a. 社長がメキシコへ来たいとおっしゃっています。
 b. 社長がメキシコへいらっしゃりたいとおっしゃっています。

はないが、前出 Tagalog の複数呼応 (§ 2.1.1.7) の場合は、任意性の背後に名詞句の単・複を標識化する範疇が明示的に存在する。また § 3 で見るような Yurok の optional agreement においても呼詞の形態的区別は明瞭であり、余剰性の簡潔化が任意性と関係する。一方、敬語呼応の相応素性は主語の属性ではなく、たいてい文中に顕在しない、話し手の主語に対する社会的地位・親疎の評価、判断に基づく特性であり、その意味では呼詞は発話者自身の内部にあって、主語と互関しながら、それを通じて動詞と間接的に呼応すると見られる (cf. § 2.2).

日本語の敬語（謙譲・丁寧）表現は、たとえ呼応と呼ぶにしても、典型的な形式的呼応とは非常に隔った周縁部に位置づけられるであろう。なぜなら、agreement morpheme は（付）接辞・小辞など形態的に“軽い”単位で実現されず、また呼詞に呼応カテゴリーが顕在せず、従って呼応特有の形式上の余剰性がない。加えて process そのものが任意的であり、相応のカテゴリーが統語・意味素性でなく現用論の特性であるなどの諸条件が重っているからである。そこで、敬語現象は広義の呼応と文体調和（or 同化）規則の境界線上にあるものとみなすことにする。

2.2.0 間接呼応

呼詞 NP が動詞と直接結合価値を持たず、それが関連する（i.e. 連体的修飾関係にある）NP が文法項であるような間接的な呼応がある。

2.2.1.

Awa⁽²⁷⁾ (New Guinea) の動詞は主語、間接目的語（動詞により義務的 or 任意的）と呼応するが、直接目的語との間には通常の呼応は見られず、直接目的語の所有者 NP の人称・数に応じて4種の呼応形態素をとることができる。

- (15) a. wegà néne sòn keki-nuw-ěq
 he my garden burn-mine-he.past
 ‘he burned my garden’

- (18)⁽³⁰⁾ a. Ngak a lu-leker-ngak a Toki
 I prt he-awakened-me prt
 ‘I was awakened by Toki’
- b. A ngalek a k-silebek-ii
 prt child prt I-kicked-him
 ‘The child was kicked by me’

2.3.3.

関係変更規則以前において目的語とのみ呼応が成立し、その後主格と無関係に3人称複数形に動詞が一致する例が Kimbundu⁽³¹⁾ (a Bantu lg) の一つの受動パターンに見られる。

- (19) a. Nzua a-mu-mono kwa meme
 John they-him-saw by me
 ‘John was seen by me’
- b. meme a-ngi-mono kwa Nzua
 I they-me-saw by John
 ‘I was seen by John’

Givón が報告している他の若干の例文から判断すると、この言語には主格呼応は存在するが対格のみとの一致は見られないようなので、例文(19)は topicalize された目的語と動詞が agree するとも推察される。この見方に誤りがなければ、Kimbundu は受動の前に目的語呼応を受ける必要はない。呼応は旧主語、(19a)の例では meme が自発的に格下げられた循環後の段階で無呼詞呼応 (cf. § 2.5. 部分的非呼応) が適用されて3人称複数の中立的な主格形態素を得る。さらに空白となった主語の座には Nzua が昇進するのでなく、直接目的語のままその位置だけを奪い (話題化操作と同じ)、対格一致形態素が動詞に与えられると解釈できるであろう。

2.4.0. 混合呼応

多項呼応の言語において、NP の文法関係が異なれば呼応の様式も異なる例がしばしば見られる。例えば主格呼応と目的格呼応で相応カテゴリーが同一でなかったり、全く別であったり、呼詞削除可能性において異なる場合もある。また呼応形態素の実現方式も呼詞の統語格によって一言語内で変動することが珍しくない。しかし呼応条件の要である文法関係については一定の格タイプに則るのが普通である。ここで混合呼応と名付けるのは同一言語に異なる格体系をベースにした一致現象が共存する場合で、実際に報告されているのは、主に時制・相別に従う能格型及び対格型呼応の混合である。

2.4.1.

メキシコの Chol⁽³²⁾ (Mayan) は現在時制動詞が対格型呼応を示し、過去時制においては能格型

呼応となる。下文 (20 a~c) は ergative タイプの 2 格呼応を見せている。

- (20) a. Ca čəmiy-on ‘I died’
 past die-1 sg Abs
 b. Ca čəmiy-et ‘You died’
 past die-2 sg Abs
 c. Ca h-k’eley-et ‘I saw you’
 past 1 sg Erg-see-2sg Abs
- (21) a. Mi k-čəmel ‘I am dying’
 pres 1sg Nom-die
 b. Mi a-čəmel ‘You are dying’
 pres 2sg Nom-die
 c. Mi h-k’el-et I see you’
 pres 1 sg Nom-see-2 sg Acc

現在時の対格型 (21) においてもやはり 2 格一致が行なわれている。ただし接辞は 4 種類あるのではなく、甲類の k- (h- は軟口蓋音の前の異形態) 1 sg, a- 2 sg は能格と主格を兼務し、乙類の on- 1 sg, et- 2 sg は絶対格・対格に共通の標識になっている。

2.4.2.

Hindi-Urdu の完了相動詞は絶対格と呼応する。名詞句は能格が有標化され後置詞 ne を伴う。

- (22)⁽³³⁾ a. lərkō ne rat bhər kam kiya
 boys night all work did
 mas.pl mas.sg mas.sg
 ‘The boys did the work all night’
- b. ləṛke rat aye
 boys night came
 mas. pl. mas.pl
 ‘The boys came (last) night’
- (23)⁽³⁴⁾ a. ləṛka rat bhər ciṭṭhiyā likhta he
 boys night all letters writes
 mas.sg fem.pl mas.sg
 ‘The boy writes letters all night’
- b. bəcca rat bhər rota he
 child night all cries
 mas.sg mas.sg
 ‘The child cries all night’

しかし不完了相の動詞を含む文では一致を trigger するのは動格・中格 (=主格) であり, [vid. (23 a,b)], 呼応格が相を基準として2分割されている. Marathi, Kashmiri 両語⁽³⁵⁾ もまた Hindi-Urdu と同様なパタンの aspect 別混合形式の一格呼応をもつ.

2.4.3.

名詞句に格の表示を持たない Jacaltec (Mayan) は動詞及び「相」形態素に付接される marker によって呼応を示すと言われる. 但し, その呼応は定動詞を含む独立主文における能格型と相標識を欠く埋め込み文に対する対格型の 両タイプに分割される混合型である. (24) (25) 各文の主節では乙類 (絶対格) と甲類 (能格) の一致形態素の出現が見られる.

- (24)⁽³⁶⁾ a. xc-ach w-abe 'I heard you'
 asp-乙 2 甲 1 -hear
- b. xc-ach toyi 'You went'
 asp-乙 2 go
- (25)⁽³⁷⁾ a. x-φ-w-ilwe hach hin-col-ni
 asp-乙 3-甲 1-try 乙 3 甲 1 -help-suff
 'I tried to help you'
- b. x-φ-w-il ha-cañalwi
 asp-乙 3-甲 1-see 甲 2 -dance
 'I saw you dance'

(25a) の従節で hach は 2 sg の乙類接辞であるが, 従属動詞 -col- に付接化されず, 同一marker でありながら h を失って相形態素に後接された (24 a, b) の -ach に対比される. (25a) 従節の hin と主節の -w- は甲類 1 sg を示す同じ形態素の異形態である. 従って, この文に関する限り従属文も ergative type の格体系に基づいているようにも見える. ところが (25b) の従文 ha-cañalwi における ha は 2 sg の甲類 marker である. その結果, 相標識を含まない文で動格と中格が同種の形態的特徴で動詞内に表示され, 受格と対立するので, 主格/対格型呼応とみなされる. Jacaltec における文タイプと, 文法関係をマークする形態素及び格体系の関連をまとめると次のようになる.

(26)		主 節		従 節	
		marker	case	marker	case
		動 格	→ 甲類……………能 格	動 格	} → 甲類……………主 格
		中 格	} → 乙類……………絶対格	中 格	
		受 格		受 格	→ 乙類……………対 格

この言語に見られる呼応の特徴として指摘されなければならないのは, 上例 (24 a,b) の乙類接辞が動詞から離れて aspect-marker に付接されている点である. Craig によれば, 絶対格が3

人称である場合 [v. gr. (25a, b)] を除き, 「相+Abs」の複合と「(Erg)+動詞」複合の間には語境界が介在する⁽³⁸⁾。すなわち -ach が動詞構成素内にあるかどうか問題であり, (24 a,b) 文を動名一致の事例として認めるべきでないという反論が予想される。絶対格形が能格人称 marker と統語・形態論的に違った status を持ち, 直接, 動詞と従属関係を結ばないことが呼応以外の統語事実から支持されるならば, (25) (27) の例でも示されるように 3 人称乙類 (絶対格) は常にゼ

- (27)⁽³⁸⁾ a. x-~~φ~~-haw-il naj 'You saw him'
 asp-乙 3-甲 2-see him
 ||
 a' xawil naj
 b. x-~~φ~~-to naj 'He went'
 asp-乙 3-go he
 ||
 b' xto naj

ロである [naj] は名詞のクラス標識で独立代名詞形として働く] から, 絶対格 NP は全て動詞呼応に参与しないという解釈が提案されるかも知れない。その場合, § 1.8.4 (前稿 p. 12) で示唆した, 呼詞となり得る NP の文法関係に関するハイアラキーに矛盾することになる。Ergative system は絶対格>能格>与格の階層を示し, (28) のいずれかのタイプあるいは iii) に加えて他の統語格の参与が認められるが, 能格のみと呼応する言語の存在は予想されていなかった。

- (28) i) 絶対格
 ii) 絶対格・能格
 iii) 絶対格・能格・与格

もし, Jacaltec の Absolutive 人称 marker を呼応現象外とするならば, 能格一格呼応と見られなければならないだろう。しかし, 問題の -ach が動詞 complex に所属するか否かは単に動詞と同一の音韻的語内にあるどうかの基準で決定できないように思われる。Jacaltec の相標識は動詞前位に固定され, 独立使用されることも自由削除されることもない故, 別語であれ動詞の存在に束縛されている。一方, 絶対格は相標識があれば必ずそれに cliticize されなければならない。

- (29) a. *xc-ach to hach 'You went'
 asp-乙 2 go you
 b. xc-ach to-yi
 asp-乙 2 go-stem augt.
 (30) a. *ch-in aɣni hayin 'I bathe'
 asp-乙 1 bathe I
 b. ch-in aɣni

結局、Abs marker は「相」を通して間接的にはあるがほぼ完全に動詞の管域内にあると認められる。Clitic は、しばしば、それが結合価をもつ筈の動詞から浮遊し、語境界を越えた他の構成素に付接するのがその特質である故、上例を Abs 呼応とみなして不都合はないと考える。

むしろ、前掲文のうち 1・2 人称 NP に対して呼応としての性格が疑われるかも知れない。何故なら (29) (30) の data⁽³⁹⁾ から 1・2 人称の独立形代名詞と付接 marker とは共起せず、前者は義務的に削除されなければならない。このような (29 b) (30b) の場合は付接化で説明されるべきで、一致の事例でないという見方もあるのではなかろうか。呼詞・応詞が形式的に顕在共起し得ることを呼応の定義的特徴として捉えるべきかどうかは、後の §4. で検討する。いずれにせよ、これらの marker は人称の如何に拘らず統一的に付接化を受けて得られるもので、Jacaltepec の呼応規則の一部に係っている事実は否定できない。

2.4.4.

スペイン語が対格型言語であることに疑義が表明されたケースはこれまでになかったように思われるが、筆者はその絶対分詞構文及び形容分詞構文において動詞呼応が能格型であるという分析を他所⁽⁴⁰⁾ で示した。それによれば、スペイン語は一部の過去分詞を含む従属節・関係節に現われる絶対格呼応と他の動詞形に見られる主格呼応との各々混合一項呼応を持つと考えられる。

- (31) a. Levantados los ojos, me miró.
 lifted the eyes me he-looked-at
 mas. pl mas. pl 3 sg
 ‘Lifting his eyes, he looked at me’
- b. Hecho esto, se pusieron a trabajar.
 done this began to work
 mas(=neut)sg neut.sg 3 pl
 ‘This having been done, they began to work’
- c. Muerto él, se terminó la discordia.
 died he finished the discord
 mas. sg
 ‘After he had died, the discord ended’

(31a) で過去分詞形の動詞 levantado はその受格 los ojos (mas. pl) に一致して男性複数形をとっているが、主文動詞 miró は表層に姿を見せていない動格 NP 3 sg に一致した preterite 3 sg 形を示している。一方、自動詞 morir (to die) の分詞 muerto (31c.) はでその中格と一致しているが、文の後半は、a, b 文の後半と同様主格 NP が呼詞となっている。従って、上文のいずれにおいても呼応は絶対格と主格の混合ベースで働いていることが認められる。この他に能格的呼応がみられるのは形容分詞を利用した関係節構文における動詞と Head の間の呼応であるが、

このような過去分詞には先時性の完結 aspect が含意されていて、§ 2.4.1 § 2.4.2 で見た完了相と能格構文の結びつきが偶然のものでない点が指摘されるのは興味深い。またスペイン語の場合はこのアスペクト要素から主文へ従属機能が発達した一定の構文にのみ絶対格呼応が観察される。なお、動詞 -do 形の呼応の詳細については拙稿「過去分詞は何と一致するか -スペイン語における能格構文」⁽⁴¹⁾ を参照されたい。(未完)

〔注〕

1. Bernard Comrie, "Ergativity" -Winfred P. Lehman (ed.) *Syntactic Typology*. Austin and London. 1978. pp. 330-1 及び R.M.W. Dixon "Ergativity" -*Language* 55 (1979), pp. 82-3 で各々用いられる S, A, P / S, A, O の3対立と同趣旨のものである。
2. Robert D. Van Valin Jr., *Lakhota syntax and universal grammar*. Unpublished Ph.D. dissertation. Univ. of California, Berkeley. 1977. pp. 5-44
3. William Foley and Robert D. Van Valin Jr., "On the viability of the notion of "subject" in universal grammar. -*BLS* 3 (1977), p. 298 なお3人称単数は行為者格も被動者格も共に \emptyset 形で呼応する。
4. この例文は Linda J. Schwartz, "On the island status of lexical items" -*Papers from the Parasession on the Lexicon*, Chicago Linguistic Society, 1978. p. 327 によるが agreement morpheme の格についての訳注は、前掲例に統一するため出口が付したものである。
5. Robert D. Van Valin, op. cit. p. 11
6. ibid. p. 14
7. 部分的にせよ受格・中格の grouping が存在し能格型の特徴をもっているので、統語格体系の種類の観点からは一種の混合呼応とみることが可能である (cf. § 2. 4.).
8. R.M.W. Dixon, op. cit. p. 82-3
9. ibid. p. 81
10. ibid. p. 83-4
11. John M. Lawler, "A agrees with B in Achenese: A problem for relational grammar." -*Syntax and Semantics* 8 (1977), p. 225
12. Simon C. Dik, *Functional grammar*. Amsterdam. 1978. pp. 116-7
13. Jeffrey Heath, "Choctaw cases." -*BLS* 3 (1977), pp. 204-13
14. Simon C. Dik, op. cit. pp. 81-3, 117
15. Edward L. Keenan, "Towards a universal definition of "subject" -Charles N. Li (ed.) *Subject and Topic*. Academic Press. 1976. p. 330
16. Judith Olmsted Gary and Edward L. Keenan, "On collapsing grammatical relations in universal grammar." -*Syntax and Semantics* 8 (1977), p. 99
17. この Data を報告している Keenan (1976), Gary & Keenan (1977), Dik (1978) op. cit. はいずれも ing phrase を subject と解釈しているが、Paul Schachter は "The subject in Philippine language-Subject and Topic (1976), p. 501 で Topic NP と Actor NP と呼応すると見ている。Tagalog を始めとする Philippines 諸言語における subject/topic に関する詳しい議論は同論文及び Dik, op. cit. pp. 88-97, Sarah J. Bell, *Cebuano Subjects in two frameworks*. IULC, 1979. pp. 13-17を見よ。
18. Simon C. Dik, op. cit. p. 82
19. Judith Olmsted Gary and Edward L. Keenan, op. cit. pp. 104-5
20. Bernard Comrie, op. cit. p. 339

21. Paul Schachter and Fe. T. Otones, Tagalog reference grammar. University of California Press. 1972. pp. 334-5
 22. Paul Schachter (1976) op. cit. p. 494
 23. John M. Lawler, op. cit. p. 221
 24. Susumu Kuno, "Japanese: A characteristic OV language." -Winfred P. Lehman (ed) Syntactic typology. 1978, p. 68 で "日本語は敬意・丁寧さのレベルに関して agreement を示す" とされている。
 25. Mildred L. Larsen, "Emic classes which manifest the obligatory tagmemes in major independent clause types of Aguaruna (Jivaro), -Studies in Peruvian Indian Languages: I (1963), pp. 4-5 に次のような記述を見ることができる。「他動詞単・複数語幹は単・複数目的語を, 自動詞単・複数語幹はそれぞれ単・複主語を示す。
- | | |
|-----------|--|
| Agkaá-ta | 'put it in' (Agkaá- 'put in singular object', -ta '2 per imperative') |
| čimpíá-ta | 'put them in' (čimpíá- 'put in plural object') |
| ahápa-ta | 'throw it out' (ahapa- 'throw out sigular object') |
| uǝá-ta | 'throw them out' (uǝá- 'throw plural object') |
| puhá-wa-i | 'he is staying' (puhá- 'sigular subject stays', -wa '3 per', -i 'declarative') |
| baǝát-u-i | 'they stay' (baǝát- 'plural subject stays', -u '3 per'] |
- 以上から Aguaruna の一部の動詞は絶対格 NP の数範疇に応じて動詞幹が交替することがわかる。
26. (13b, c) (14 b) は "おっしゃる" の主語が中野先生又は社長以外の人を指している方がより 自然な解釈である。
 27. Richard Loving and Howard McKaughan, "Awa verbs. Part 1: The internal structure of independent verbs."-Verb Studies in Five New Guinea Languages. SIL 1964. pp.1-30
 28. Judith Olmsted Gary and Edward L. Keenan, op. cit. p. 99
 29. 例文 (17) とこの項目の data 及びその分析は Gary and Keenan, pp. 99-100 に負うが, 中格との一致があるか否かは不明。
 30. David E. Johnson, "On Keenan's definition of "Subject of""-Linguistic Inquiry 8 (1977), pp. 684-5
 31. Talmy Givón, "Topic, pronoun and grammatical agreement" -Charles N. Li (1976), op. cit. pp. 179-80
 32. Bernard Comrie (1978), op. cit. pp. 352-3
 33. Rajeshwari Pandharipande and Yamuna Kachru, "Relational grammar, ergativity, and Hindi-Urdu." -Lingua 41 (1977), pp. 220
 34. ibid. p. 223
 35. Yamuna Kachru and Rajeshwari Pandharipande, "On ergativity in selected South Asian Languages." -Studies in the Linguistic Sciences. 8-1 (1978), pp. 117-120
 36. Colette G. Craig, The structure of Jacaltec. Univ. of Texas Press. Austin and London. 1977. p. 111
 37. ibid. pp. 115-6
 38. ibid. pp. 121-2
 39. ibid. p. 102
 40. 出口厚実, "Ergativity and reflexive constructions in Spanish" 第3回関東関西合同スペイン語研究会 (1978年12月2日於東京外大) 口頭発表。
 41. 出口厚実, "過去分詞は何と一致するか? -スペイン語における 能格構文" -Más y Menos 2 (1979), pp. 4-13

(Aug. 20, 1979)